萱沼家文書による「月江寺山門」の復元研究

ｋ９９００８　伊藤亜由美

Ⅰ．はじめに

日本建築史を通観したとき、神社仏閣は近世に至るまで常に時世の代表たる建築であり、大工棟梁にとっては自らの技量を世に示す絶好の機会であった。中でも、近世の大工組織は地域的な活動をしており、大工流派ごとに特徴のある建築を残した。

１－１　研究の目的

本研究では山梨県富士吉田市吉田において活躍がみられる郡内大工『萱沼家』について取り上げる。近年の研究により、富士吉田市史によって「福源寺山門」と分類された図面が、実際には「月江寺山門」であると判明した。また、月江寺に関する普請史料のうち、文政期山門普請での図面史料は圧倒的に充実している。文政期は、萱沼家の大工技術が最も高まりを見せる時期であり、この建築に萱沼家が如何に力を注ぎ込んだかが窺われる。

一方、細部意匠に着目すると異なる点もある。ここで残された古文書及び図面に基づき、その古文書当時の建築像を復元することにより、設計を変更しながら確定していく過程を明らかにすることを研究の目的とする。

１－２　研究の方法

①月江寺に関する残された史料を整理し、その内容を解読・把握する

②―昨年の、大越生広氏による「近世甲州大工の造営活動に関する研究―郡内大工　萱沼家の活動について―」を参考に、細部意匠を検討する

③上記に基づき、３次元ＣＡＤを用いて復元し、その設計の変容過程を明らかにする。

Ⅱ．郡内大工

２－１　近世大工組織への移行

近世における大工組織成立以前、「細工場」制の比較的自由な支配体制をとっており、平等な仲間意識があった。その後、宝暦８年（1758）に大工仲間が成立したと考えられている。大工組織、独自の普請活動のシステムが発展・継承することで、独自の職域を有した郡内大工の特質が生まれていった。

２－２　郡内大工棟梁・萱沼弥左衛門家

萱沼家は18世紀以前より、郡内下吉田村において大工活動を行っていたと伝えられる。その立役者は萱沼弥左衛門である。

萱沼家文書において、最古のものは宝永２年（1705）「郷中根舞之覚」（忍野浅間神社普請関連文書）であるが、それ以前の弥左衛門家の大工活動については明らかになっていない。しかし、萱沼家文書、宝永４年（1707）「西方寺ふしん覚帳」には、「下吉田萱沼弥左衛門　西方寺三右衛門他１人」と記載されており、18世紀初頭にはその活動を認められる。

月江寺山門の諸図面は、それより約120年後、弥左衛門の子孫の大工により作成されたものである。

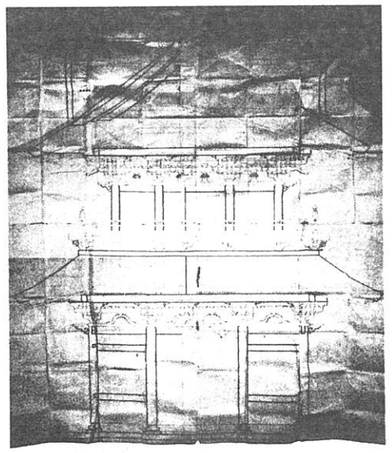


図１　月江寺山門　建地割図

Ⅲ．月江寺山門に関する史料

表１　月江寺山門に関する萱沼家史料一覧

年代		史料名	内容
文政 6年 2月	1823	①「月江寺山門覚」材料注文覚	部材の注文及び見積
文政 6年 6月	1823	②「水上山月江寺山門」	山門破風
		③「水上山月江寺山門」	側面図下書
文政 7年 4月	1824	④「月江寺山門指図」	山門平面図　下重の指図
		⑤「水上山」	下屋根・二階側面図
		⑥「水上山月江寺」	斗栱・垂木（架構図）
文政 7年11月	1824	⑦「水上山月江寺」	尾垂木の詳細図面（一重）
		⑧「水上山月江寺」	尾垂木の詳細図面（二重）
		⑨「水上山月江寺山門」	屋根図面
		⑩「月江寺山門」	山門尾垂木（彫刻）
文政 9年 8月	1826	⑪「月江寺山門下の重」	雲形彫刻
文政10年 7月	1827	⑫「下暮地そんばん志図渡し月江寺より」	建物正面図一部分下書
文政10年12月	1827	⑬「月江寺山門上の重の」	屋根上の鬼板（蓑束）
文政12年 8月	1829	⑭「月江寺山門形ぎぼうし」	擬宝珠図面
文政13年12月	1830	⑮「水上山月江寺山門津里手証分之事」	吊手釘寸法覚
天保 3年11月	1832	⑯「月江寺山門」	彫刻図面
		⑰「月江寺山門大内梁形」	大内梁の絵様図面
天保 3年12月	1832	⑱「月江寺山門」	小内梁彫刻
		⑲「月江寺山門角板ひじ木」	山門雲形肘木（彫刻）
天保 4年 2月	1833	⑳「月江寺山門雲形」	山門雲形彫刻
		㉑「月江寺山門破風前」	雲形彫刻
		㉒「月江寺山門破風前内梁形」	破風梁彫刻
年未詳		㉓上重平面図	
		㉔建地割図（縦 1922mm ×横 1840mm）	：図1参照

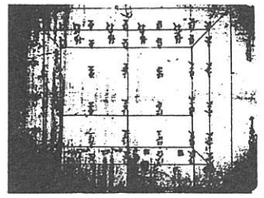
３－１　月江寺山門に関する萱沼家史料について

萱沼家文書中の月江寺山門に関する史料一覧を表１に示す。表１中、⑥⑩⑬各部意匠の図面内容は建地割図と一致する。これらを見ると、山門普請は文政６年始めから計画段階に入り、文政７年４月前後から普請が開始されたと考えられる。そして、文政10年には大方の建方を終えたとみられ、細部の絵様や彫刻等は10年近くの歳月を費やして徐々に行っていったものと推測される。

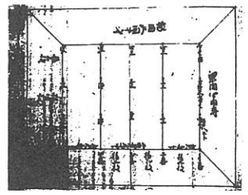
従って、月江寺山門の普請はおよそ10年間かかったことになる。

３－２　意匠の変化

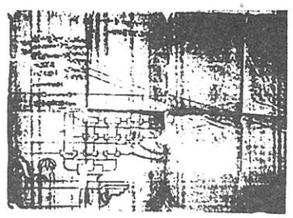
史料中、④㉓と建地割図（図１）を比較すると、この建築の設計が変更されていたことがわかる。それは枝割の相違に、以下のように表れている。



㉓上重平面図

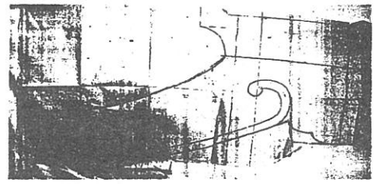


④文政７年４月「月江寺山門指図」



⑥文政７年４月「水上山月江寺」

⑬文政10年12月「月江寺山門上の置の」



⑩文政７年11月「月江寺山門」

図２　月江寺山門　各図面

（図中番号は表１の番号）

下重では、中央柱間を４枝広げ、脇間を１枝小さく

上重では、中央柱間では４枝、脇間では１枝狭めた

実際は計画段階より上重を下重に比べ縮小している。

Ⅳ．月江寺山門の意匠はどこから来たか

４－１　ユタ山門の建地割図

年月日は未詳だが、萱沼家文書には月江寺山門以外の山門の木割が記されている。以下に示すユタ山門（図４）の建地割図もそのうちの一つである。ユタとは「雨打」と書き、庇を意味するので、ユタ山門とは二層門でなく、単層裳階付の門を指している。ユタ山門は、同地域において活躍していた二大流派の江戸建仁寺流の山門と意匠上類似点が多く、萱沼家による建築は、江戸建仁寺流の意匠に近い特徴をもつといえる。

萱沼家月江寺山門を江戸建仁寺流山門、萱沼家ユタ山門と比較してみる。

表2　江戸建仁寺流山門、萱沼家ユタ山門、萱沼家月江寺山門の比較表

	江戸建仁寺流		萱沼家		萱沼家	
	「甲良宗賀伝来目録」『禅家伽藍図』		富士吉田市萱沼巧彌家伝書		建地割図(年未詳)より測定	
	五間山門	枝割	ユタ山門	枝割	月江寺山門	枝割
桁行×梁間	5間×3間		3間×3間		4間×3間	
屋根形式	入母屋造		入母屋造		入母屋造	
礎石	無		無		有	
礎盤	有(禅宗様)		有(禅宗様)		有(禅宗様)	
柱形状	粽付円柱		粽付円柱		粽付円柱	
台輪	有　　/3分	0.864	有　　/3分	0.864	有　　/0.3625分	0.932
長押	無		無		無	
頭貫	有　　/8分	2.304	有　　/8分	2.304	有　　/0.75分	1.928
内法貫	有　　/6分	1.728	有　　/6分	1.728	有　　/0.625分	1.606
腰貫	有　　/6分	1.728	有　　/6分	1.728	有　　/0.625分	1.606
地貫	有　　/6分	1.728	有　　/6分	1.728	有	
木鼻	有(上・下)		有(上・下)		有(上・下)	
組物(上重)	四手先		三手先		三手先	
(下重)	四手先		出組		二手先	
中備	組物		組物		上:蟇股	
					下:蓑束	
垂木	1あいた、8枝かけ		—			
巻斗(長さ)	大間を18に割り、1つを巻斗の長さにすべし	3	—		(8.75)　/L×0.0502(L=大間)	1.406
斗あい	巻斗の長さを3つに割り、1つ	1	—		(5)　　/L×0.0287	0.803
下の重	長三斗程柱の間延びれば、組物広がるべし		—			
下の重						
大間	24枝	24	36枝	36	28枝(174.3)	28
柱太さ	大間にて1寸2分斗	2.88	大間にて8分取	2.88	16	2.57
側柱高さ	高さ柱貫下端からくつの上まで3あいた半也	28	表36の間にて9分取	32.4	150.45	24.17
頭貫、内法貫間	柱ほど	2.88	こたの柱ほど	2.88	15.5	2.49
丸桁　高さ	8分下端斗あい	2.304	7分	2.016	11.25	1.807
下ば		1	—		8.75	1.405
地垂木	3寸8分　/　7枝		3寸8分　/　7枝		2寸6分	
飛檐垂木	2寸8分　/　5枝		2寸8分　/　5枝		2寸5分	
下重屋根勾配	4寸8分		4寸8分		4寸8分	
縁						
縁の広さ	縁の広さ組物1あいた也	8	—		73.945	4.621
屋根上長押	6分	1.728	5分	1.44	7.5	1.205
縁床	3分	0.864	3分	0.864	2.5	0.402
上の重						
柱太さ	下の柱ほど	2.88	—		13	2.088
内側柱太さ	側の柱に2分増し	3.456	—			
側柱高さ	高さ下の柱半分	14	妻の1間を立つ	12	72.5	11.647
丸桁　高さ	8分下端斗あい	2.304	8分	2.304	11.25	1.807
下ば		1	—		7.5	1.205
地垂木	4寸		4寸		2寸6分	
飛檐垂木	3寸		3寸		2寸5分	
尾垂木(下)	6寸		—		無	
尾垂木(上)	5寸		—		有	
軒の長さ	脇の間に1手あい短く		下と同割			
内梁	9分	2.592	—			
上重屋根勾配	7寸8分		三つもや　引渡し7寸6分勾配			
	5分					
	2分					

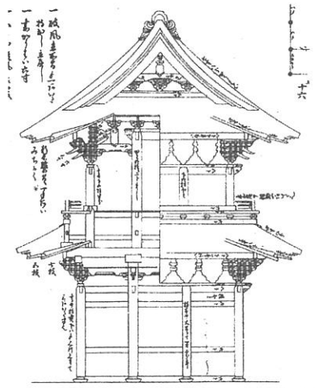


図３　「甲良宗賀伝来目録」『禅家伽藍図』
：五間山門　〔貞享２年(1685)記〕

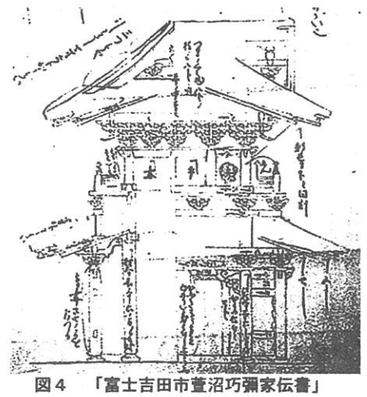


図４　「富士吉田市萱沼巧彌家伝書」
：ユタ山門　建地割図

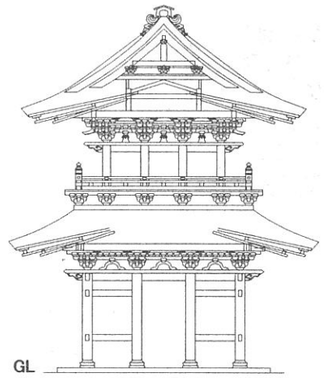


図５　建地割図より
：月江寺山門　梁間立面図

Ⅴ．月江寺山門の特徴

５－１　意匠の相違

比較の結果、図３、図４においては、ほぼ純粋な禅宗様建築であるが、図５の月江寺山門にはそれらと異なる特徴のあることがわかった。

ⅰ)斗栱間に蟇股を用いる（下重）
ⅱ)斗栱間に蓑束を用いる（上重）
ⅲ)尾垂木が遊離しておらず、装飾尾垂木である

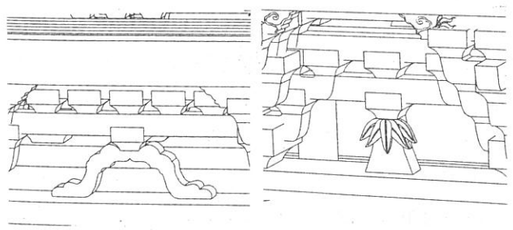
即ち、禅宗様を基調としながらも中備に蟇股、蓑束を用いる和様の意匠とし、詰組の重量を減じられるため、尾垂木を構造的耐力の無い装飾尾垂木に変えたということがわかる。

また、月江寺と同時期に萱沼家により建設された「大正寺」（富士吉田市新倉）の鐘楼に着目すると、下重は尾垂木を用いずに中備は蟇股、上重は尾垂木を用い、中備は蓑束である。

文化７年(1810)の「大正寺志ゆうとう注文之覚」を見ると、文化７年頃に鐘楼堂が普請されたことが窺える。また、月江寺の注文覚が出された時期と近く、萱沼家は大正寺鐘楼堂に対応するのと同様の手法で、月江寺山門を純粋な禅宗様建築から和様の折衷に意匠変更したと推察できる。

５－２　ＣＡＤによる建ち上げ

３次元ＣＡＤにより史料のデータを用い、月江寺山門を復元した。図６－１，図６－２に示す。



ａ、蟇股　　ｂ、蓑束
図６－１　ＣＡＤによる建ち上げ

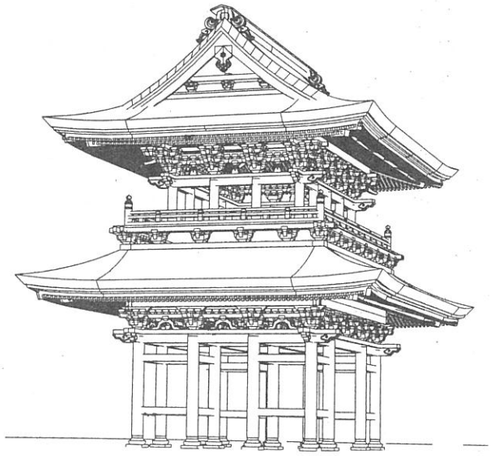


図６－２　ＣＡＤによる建ち上げ

Ⅵ．まとめ

萱沼家は、二大流派のうち江戸建仁寺流の意匠を基に、構造的、美観的な面より、和様を取り入れた意匠に変更して月江寺山門を設計施工したと考えられる。

斗栱、上重尾垂木の反り、台輪、木鼻は完全な禅宗様系の意匠であるが、中備ほかに和様の意匠を採用している。設計変更の理由は定かでないが、地域的な意匠の好み、経済的理由などがあげられるだろう。

—参考文献—
富士吉田市史　史料編　第４巻　近世２
大越生広『近世甲州大工の造営活動に関する研究』
(2000年度東京理科大学修士論文)
小川友美『山梨萱沼家文書による福源寺の復元研究』
(2001年度芝浦工業大学卒業論文)

指導教員名　伊藤　洋子教授